

# 郁達夫『蜃楼』の未完の背景をめぐって

高橋みつる (国語教育講座)

## 一、はじめに

郁達夫の小説『蜃楼』は、第十二章まで発表された後、遂に完成することがなかった未完の小説である。そのため各種選集類にも必ずしも収録されているとは限らず、彼の小説の中では、これまであまり重視されず、言及されることも少なかった作品である。しかし、郁達夫の日記や書簡を見ると、その後も『蜃楼』の続稿執筆に関する発言が随所に見られ、彼がこの小説の完成に並々ならぬ意欲を抱いていたことが窺われる。

郁達夫には、未完のままとなった小説が、『蜃楼』以外に、現在判明している限りでは、『春潮』(一九二二年十一月)、『人妖』(一九二三年十二月)、『没落』(一九三〇年六月)の三篇ある。やりかけた仕事を最後までやり遂げたい、せっかくだなぞ『蜃楼』にはこれほどまでに執着したのであろうか。そして、完成させたという強い願望を持ちながら、なぜ実現しなかったのであろうか。また、郁達夫には、『蜃楼』を含めて三部作とする遠大な構想があったが、『蜃楼』の挫折とともに、その計画も頓挫することとなる。

小稿では、『蜃楼』の内容と執筆当時の時代状況や作者の生活・思想状況を照らし合わせながら、三部作構想も視野に入れて、『蜃楼』挫折の背景や意味を考察していきたい。

## 二、『蜃楼』における人物像

『蜃楼』は、最初、一九二六年六月一日、『創造月刊』第一巻第四期に第一章から第四章まで発表された後、一九三二年三月十日、『青年界』第一巻創刊号にあらためて第一章から第六章まで、四月十日、第一巻第二号に第七章から第十章まで、五月十日、第一巻第三号に第十一章から第十二章まで連載されている。

小説の主要な登場人物は、主人公の陳逸群と、詒孫・康夫人という二人の女性

である。あまり知られていない小説のため、煩瑣ではあるが、内容紹介も兼ねて、三人の人物像について少し詳しく見ていくこととする。

主人公陳逸群は北洋道台の令息で、かつてオックスフォードに五年暮らし、その後南欧を二年間旅して、大学教師や役人を歴任した典型的な近代のエリート知識人である。しかし、現在の彼は理想も破れ、心身共に傷つき疲れ果てた敗残の身である。冷たく寂しそうな表情を浮かべ、一人旅の孤独の悲哀を漂わせている。第一章で、陳逸群がはるばる諸国を歴遊してきたことや、その氏名、北京出身の三十歳で、上海から病氣療養のために来杭し、無職であることなどが明かされる。そして、陳逸群の経歴の中で、現実の政治的事件との重要な関わりが示唆されるのは、逸群が手にした一通の手紙によってである。差出人は、詒孫、封筒の宛名は、『錦州大本营の陳參謀』となっている。

宛名の「陳參謀」は、もちろん陳逸群のこと、手紙の中にある郭軍長は、奉天軍に反旗を翻した軍人郭松齡のことである。陳逸群は、郭松齡軍の參謀として従軍し、錦州に駐屯していたのである。ちなみに、歴史的事実としての郭松齡の反乱事件は、一九二五年十一月に発生している。『蜃楼』の最初の発表は翌年の六月であることから、この小説が、主人公の設定において、間接的ながら激動の同時代史を背景としていることが確認される。さらに、第三章で、陳逸群の回想によって、「数週間前の馬上の生活や砲弾の音、敵軍の反撃、変装しての逃亡、大連に着いて初めて自分の死亡記事を見、上海で急病になった」という参戦後の履歴が、より具体的に示される。戦闘に敗れた後、逃亡先の上海で発病し、医師の薦めで杭州に静養に来たのである。小説の展開にとって重要な意味をなす、これらの陳逸群の経歴については、第四章までにほぼ述べられており、作者が執筆を開始した時点で、少なくとも人物像の設定については、既にある程度周到な構想が準備されていたものと考えられる。ただし、陳逸群の氏素性が完全に明らかとなるのは、最初の掲載から約五年後に新たに連載された第八章においてであった。

次に、二人の女性の人物像と、陳逸群との関係について見ていこう。詒孫は、

陳逸群が好意を寄せる女性であるが、小説では、彼女が直接登場することはなく、陳逸群の回想を通してのみ描かれる。陳逸群が詒孫と知り合って二年、彼女は活発で、どんな異性に対しても細かい心配りができると同時に自己主張も忘れない。陳逸群もそんなところに惹かれていたのであるが、彼女は既に結婚している。冷静なときには詒孫夫婦の仲睦まじいことを願う逸群であるが、自分と親密なつきあいのある彼女に、自分の面前で夫への熱情を見せつけられると、謹厳な逸群には一種の侮辱のように感じられるのである。詒孫にしてみれば、陳逸群に対してとる親密な態度は、男女間の恋情に根ざしたものではなく、当然ながら、陳逸群と詒孫夫婦の間にとりたてて波風が立つわけでもない。結局、陳逸群の一種の妄想が生んだ失恋と見ることができよう。小説の時間軸で見れば、詒孫はすでに過去の人であり、陳逸群の傷心の一因として、折りにつけ自分の人生を振り返らせる働きをしている。

もう一人の女性、康夫人との出会いも、詒孫と無関係ではない。第四章で、陳逸群が西湖に遊んだ時、西冷印社の茶店で、後ろ姿が詒孫そっくりの、黒いチャイナドレスを着た女性を見かける。その美しい顔立ち、どことなく寂しげな微笑にすっかり魅せられた陳逸群は、彼女が何者でどこに住んでいるか突き止めることを決意する。この時点では、詒孫と面影が似ていることと、連れの紳士が夫と思しきこと以外、陳逸群にも読者にも謎の女性である。女性の正体は、陳逸群が松木場結核隔離病棟に入院した後、明らかとなる。山肌に点在する隔離病棟の中の一棟、山頂の婦人結核療養所清氣院を創立した女性慈善家の康夫人だったのである。西冷印社で見かけた黒衣の女性が、「病的な微笑」だったのは、彼女自身が結核を患ったことがある、という履歴の伏線であり、そのとき陳逸群が現在いる特等室に住んでいたことも、陳逸群と彼女を結びつける不思議な縁となっている。そもそも、風邪から症状を悪化させて入院する羽目になってしまったきっかけは、夜中まで彼女の居場所を地図で探索していたからであった。康夫人との偶然の再会に驚き、お茶と呼ばれたことで期待と不安に眠れぬ夜を過ごした陳逸群は、翌朝、大自然の中で冷静さを取り戻し、客観的な自己分析を始める。少なくとも、発表された冒頭から全十二章を見る限り、詒孫に対してと同様、陳逸群と康夫人との関係も、逸群からの一方的な好奇心や憧憬に過ぎず、そこに男女間の愛情や人間関係をめぐる複雑な葛藤が描かれているわけではない。

この後、小説は、結核療養所を舞台に、陳逸群と康夫人との関わりを中心として新たな展開をみせることが予感されるが、次の第十二章では、再び陳逸群の回想場面となり、欧州からの帰途上、地中海で経験したアメリカ娘ジェニー・バー

グマン (Jennie Bergman) との短いロマンスが語られて、途絶えている。

### 三、『蜃楼』の特徴

以上、『蜃楼』の三人の登場人物について見てきたが、では、この作品は何を描こうとしたものであろうか。

前章の説明でわかるように、一見、詒孫・康夫人・ジェニーたちをめぐっての恋愛小説であるかのように見えながら、其の裏、純然たる恋愛小説とは見なし難い。また、主な舞台は結核療養所ではあるが、所謂サナトリウム小説<sup>4</sup>というわけでもない。あるいは、西湖をはじめとする杭州の風光が微に入り細に入り描写されているが、もちろん、紀行文学というわけでもない。いずれの要素・傾向も部分的に含んではいるが、基調を成しているのは、やはり、陳逸群のこれまで経てきた人生に対する絶望と孤独と傷心ということになろう。

たとえば、血痰を見て動揺し、混乱した頭に浮かんだ次のような考えが、陳逸群の心境を表している。

私は今まで何の事業も成し遂げていないばかりか、生の楽しみ、生の真の意味さえも味わったことがない。……従軍して出発した時のあの満腔の情熱・理想は、今、生死の境に至って考えてみれば、幻となってしまった。もともと、そんなものだったのだ。私たちが社会を改革し、制度を改革しようとしたのは、『生きる』ためではないのか？そして、自分と民衆の生の幸福を増進するためではなかったか？

療養所に落ち着いて、病状が安定した後、彼は、さらに、過去の人生の意味を次のように自己分析している。

私の一生は、本当に無意味な悲劇だった。そして、この悲劇を生み出したのは、全く時代が招いたはずとしか言いようがない。私は結局異常な時代の奇形児なのだ。その上、この劣悪な環境に蝕まれては、一層收拾がつかなくなる。第一の間違ひは、中国人に生まれながら、よりによって中途半端なヨーロッパ世紀末の教育などを受けたことだ。……(中略)……私はともかく自分なりの自我を発見し、また、その自我主張を拡充し、さらに突き進んで、障害物と死に物狂いで戦ったと言える。だが、その結果得たものは何だったか？……(中略)……空っぽ、空っぽ、空っぽ、人生万事、結局は空っぽなのだ！

ヨーロッパの新思想を身につけた一人の知識人が、伝統中国の厚い壁にぶつかって、敗北して活路を見いだせず、虚無の境地に陥っている。そして、この悲劇の淵源は、「異常な時代」にあるとして、「二千年の伝統的礼教の束縛を受けてきた」

中国社会を告発しているのである。どうやら、作者の主張も作品の主題も、ここにありそうに思われるが、この論理は孤立的に存在するだけで、これを支える形で有機的にストーリーが組み立てられているわけではない。

あるいはまた、『蜃楼』は、陳逸群の心身の挫折と再生を描こうとしたのである。陳逸群がこれまでの人生を振り返って、空しいと嘆いたのは第八章であるが、第九章で、かつての謎の女性、康夫人と再会してからは、悲傷感はやや影を潜め、彼女への関心と愛情が陳逸群の心中を占めるようになる。康夫人の出現によって、傷ついた心が癒され、次第に立ち直っていく、という話である。しかし、再生の契機・原動力となるには、陳逸群の康夫人に対する関心の有り様は、少し俗っぽい情欲に傾きすぎているように思われる。まして、第十二章の挿話は、あまりにも唐突な上、陳逸群の女性遍歴の側面を強調する結果を招いている。そもそも「異常な社会」によってもたらされた悲劇、社会改革という高邁な志が破れて陥った虚無感が、一女性への思慕だけで解消するものかどうか、疑問である。

このような『蜃楼』の不可解さ、即ち主題が不明瞭で展開が不透明であるのは、第一の原因は、作品が完成していないためであるが、より根本的には、作品の手法上の問題、とりわけ情緒に流れて焦点の定まらない書き方に、大いに関係していると思われる。また、その創作手法とも関連して、『蜃楼』には、郁達夫が好んで描くいくつかの人物像や描写のパターンが見られる。その一例として、まず、主人公陳逸群の人物形象自体が、彼の心情と行動様式といい、まぎれもなく、郁達夫が倦むことなく描き続けてきた、作者自身を彷彿とさせる、神経質で病弱な多情多感の知識人であるという点である。換言すれば、郁達夫としては珍しく、軍人でも有産階級という特異な人物設定に挑戦しながら、それまでの貧しく不遇な境遇の主人公とは異なる、新たな人物像を構築できなかったということである。もっとも、郁達夫には、そのような意思は初めからなかったかもしれない。

次に、陳逸群が松木場の隔離病棟に入院して、彼の世話係となる眉目秀麗な少年看護士李君を見たときの描写である。陳逸群は、少年の赤い頬、黒い瞳、笑うと弓のような細い目、そのかわい小さい顔に見覚えがあり、さんざん考えた末、中学時代の親友とそっくりであることに気づいて、思わず顔を赤らめる。親友を思い出して恥じらう、というのは普通ではない。明白には表現されていないが、陳逸群が過去において同性愛的感情を抱いたことがあることを暗示しているように思われる。ここで、郁達夫のそれ以前の作品、『茫茫夜』の于質夫と呉遲生の間において、あるいは『落日』のYからCに対して、同性愛をほめかす描写があったことが想起されよう。

さらに、『春風沈醉の晚上』や『遅桂花』等に描かれた「情欲の浄化」の図式も、第十一章に表れている。康夫人を思って、一晚中、愛欲と感傷でかき乱された陳逸群の心が、大自然のもとで、悟りの境地へと化していき、彼の欲念や自我は、清新で純粹な田園の朝景色によって呑み込まれてしまふ、というものである。違いがあるとすれば、前者は、相手の女性の純真さが主人公の理性を呼び覚ましたのに対して、『蜃楼』では、康夫人は眼前には居らず、主人公の邪念を浄化したのは自然の景物であった点である。

ところで、郁達夫の出世作『沈淪』末尾の「祖国よ祖国、私が死ぬのはおまえのせいだぞ」はあまりにも有名な台詞であるが、この言葉は主人公の性的苦悶と民族的屈辱感を象徴している。同様に、『蜃楼』第十二章で、ジェニー・バーグマンに言葉巧みに言い寄られた陳逸群が、最後に「満身創痍になりながら、なおも欧米列強と対等の地位になれない祖国を思い出す」場面は、その論理の根底に、『沈淪』と相通する苦悶を看取することができる。ジェニーと陳逸群との関係は、表面上は思いを寄せられる陳逸群の方が優位に立っているようであるが、実はジェニーは自分の性的魅力によって男を弄ぶような女であり、恰好の対象とされた陳逸群が危うく籠絡されかかる、という状況設定である。そして、そのとき彼を思い止まらせたものが、祖国中国の惨状であったのである。舞台が『沈淪』の日本から欧州へ、抑圧者が日本人から欧米人へ変わったものの、そこに被抑圧者の民族的悲憤という共通の認識をうかがうことができる。

以上述べてきた同性愛的描写・情欲の浄化・民族的悲憤といった描写やモチーフは、いずれも作品全体あるいは前後の脈絡において、緊密な関係性をもって構成されているわけではない。孤立的に挿入されているのでどこか唐突の感があり、主人公の形象をはじめとするそれらの既視感が、かえって作品の斬新さを削ぐ結果となっている。このように見ると、おそらく、『蜃楼』は、たとえ完成したとしても、所謂成功した作品となる可能性は少なかったであろう。

作品分析の最後に、『蜃楼』の表現上の優れた点を一つ指摘しておきたい。それは、主人公の心境と自然描写が密接に結びついていて、相互に作用を及ぼしている、ということである。「遊記」にも才能を発揮した郁達夫のこと、『東梓関』『遅桂花』等秀逸な自然描写が際立つ小説は他にもあるが、『蜃楼』は中でも、その比重と精妙さが顕著である。上記のモチーフでも触れたように、陽光、冷気、広大な原野は、陳逸群の邪念を追い払い平常心を取り戻す作用をしている。つまり、穏やかで晴朗なる大自然は、主人公の精神の浄化・癒しの働きをしているのである。第三章で、詒孫のことや、従軍前の苦悶やその後の後悔の情を思い出したと

き、空を仰いで、「ああ、この悠久の果てしない空、この平和な冬の日」と思うと、知らず知らずの内にいつものどかな心情に戻っていた、というのも、自然の癒しの働きである。陳逸群の病状が回復するのも、暖かい小春日和の好天が続いた数日の間であった。

逆に、陰鬱なる自然は、陳逸群の憂いや恐怖といったマイナスの心境を反映している。例えば、風邪をひいた陳逸群が病院に向かう道中は、前日の明朗な風情と打って変わって、どんよりと曇った空と不気味な湖水が、彼の不安な心情を代弁しているかのようなのであるし、隔離病棟に入院した日の陳逸群は、ガラス窓の外の淡雪が溶ける音さえも聞こえるような一面の静寂に、いわれのない恐怖を覚える。作者が最も意匠を凝らしたと察せられる描写は、入院する日の朝、一晚の内に、湖畔も周囲の峰々も一面の雪景色に変わり、一幅の水墨画の世界が出現する場面である。ここでは、雪景色が金聖嘆、詒孫、柳永へと連想を呼び、かつ、主人公の心象や情景を作者の造詣が深い古典詩詞に凝縮させる、という手法が採られている。

小説としての完成度から見ればあまり高いとは言えない『蜃楼』の中で、このような主人公の心境表現と結びついた優れた自然描写は、個別的ではあるが精彩を放っている。そこには、郁達夫の豊かな感受性と鋭い観察眼、そして杭州の町に対する深い愛着とが感じられる。杭州は、郁達夫にとって、故郷富陽に次いでなじみ深い山紫水明の地であったからであろう。

#### 四、『蜃楼』執筆の動機と背景

ここまで、登場人物相互の関係やストーリー展開、表現上の特徴を中心に小説『蜃楼』を検討してきたが、ここで、作者郁達夫に視点を移して、『蜃楼』執筆の動機や背景、その後の経緯について見ていくこととする。

まず、主人公陳逸群の人物設定で触れたように、郭松齡の反乱事件という史実が、構想のひとつのヒントとなっていることは間違いないであろう。先に、この事件の概要について簡単に説明しておく。

郭松齡は、奉天省瀋陽県の人。張作霖の部下となり、奉天陸軍講武堂教官として東北軍近代化や張学良の教育に当たり、奉天軍の連隊長、師団長などを歴任した。事件の発端は、一九二五年、二四年十月以来北京の実権を握っていた馮玉祥の国民軍と、奉天軍との間に対立が起こり、第三方面軍副軍長兼第十軍長として天津に出動した郭松齡が、十一月、馮玉祥・李景林と連絡して、張作霖に反旗を翻したものである。郭松齡は、二十二日に馮玉祥と正式に「反奉密約」に調印

し、張作霖に退位を要求、翌日、七万の大軍を率いて灤州を出発し、十二月六日には錦州を占領するものの、二十二日の激戦に大敗して、二十四日夫人と共に捕らえられ、遼中県に護送されて、翌日銃殺された。

さて、『蜃楼』では、郭松齡軍の参謀を務めた陳逸群が、敗北逃亡の末、杭州にやってきたのが十二月初旬、錦州に駐屯していたのはそれよりもっと前ということになる。実際には、錦州進攻が十二月初旬であるから、小説の時間設定と史実との間には、多少のズレがあるが、逆に見方に拠ればこのズレはわずかなもので、郁達夫は比較的事実の忠実に描こうとしたと受け取ることもできる。そのような作者の姿勢は、続稿を書くために杭州に滞在していた一九三二年十一月三日の日記に、「午前は図書館で過ごし、民国十四年（一九二五）十一月二十四日から十二月二十四、五日までの古い新聞に眼を通して、郭松齡に関する事跡をたくさん書き写した」と記されていることから窺われる。

では、事件が起こった頃、郁達夫はどのような生活を送っていたのであろうか。はつきりした期日は不明であるが、郁達夫は、二五年十一月、武昌師範大学の騒動に巻き込まれて排斥を受け、職を辞して上海に帰っている。その後、結核が再発して、翌年二月頃まで、杭州の結核療養院や富陽の実家で療養生活を送っている。憤懣と失意の上海帰還、そして疲労とストレスによる結核の再発、杭州の結核療養所における療養。郁達夫の当時の状況は、『蜃楼』に描かれた陳逸群の行跡と、時期的にも地理的にも見事に符合している。しかも、郁達夫は、その時陳逸群と同じ三十歳であった。そこで、当然次のような疑問が浮かんでくる。もしかすると、郁達夫は、陳逸群という架空の人物を借りて、自分自身の真情を吐露しようとしたのではなからうか。そう仮定するならば、すでに言及したように、陳逸群の人物形象が郁達夫を彷彿とさせることも容易に理解できる。また、杭州の入念な実景描写とそれに伴う陳逸群の心理描写も、特に最初に発表された第四章までは、概ねこの時の療養生活の見聞や体験を下敷きにしていてと考えられる。

もう少し、郁達夫の文章を見ていこう。  
男の三十歳は、最も危険な年齢である。……私自身が今年三十歳になったが、このような心の苦しみ、気力が失われた苦しみは、二、三年来、一刻も私の脳裏から離れたことがない。その上、去年肺病に罹って以来、肉体も日増しに痩せ衰えてきた。

私の半生は、誠に空しく浪費されてしまった。人類に対して、社会に対して、自分に対してさえも、有益なことは何一つしていない。（『達夫全集』自序）一九二六年六月十四日）

これは『蜃楼』の発表直後に書かれたものであるが、三十歳という節目の年齢であること、精神的苦痛と身体的衰弱という苦境にあること、そして何よりもこれまで的人生に対する無為感・空虚感、前章で触れた陳逸群の自己分析と似通っている。郁達夫のこの頃の落ち込み方は確かに相当ひどかったようで、「私が創作に従事して以来、これほど心境が劣悪だった経験はこれまでにない」（『五年来創作生活的回顧』一九二七年八月三十一日）と述べているほどである。

ここで、気にかかるのが、郭松齡事件に対する郁達夫の反応・見解である。管見の限りでは、郁達夫がこの事件について直接言及した記述はない。

上海に着いてから、彼は元々すぐに北京に帰るつもりであったが、あいにく毎年止むことのない内戦が、また津浦沿線で勃発した。強姦略奪、放火殺人に至る所で行われている。匪賊ともつかず、兵隊ともつかない輩は、残虐が習性となっていて、決して一般民衆を見逃して、無事に旅行させてはくれないのである。（『煙影』一九二六年三月十六日）

『煙影』は短編小説であるが、自伝的色彩が強く、大学の職を辞して、結核の悪化と経済的不如意のため上海で無為の時を過ごしていた文朴が、旧友の援助で帰郷する話である。事件の最中に書かれた『牢騷五種』（一九二五年十二月十八日）にも、「今北京に帰って静養したいと思っても、軍隊と匪賊に阻まれて、租界を一步も出られない」と、引用の一節と同様の事態が述べられている。この頃、郁達夫の妻子は北京に住んでおり、兵乱の為に彼らを訪ねて行くことができなかったのである。津浦線は天津と南京を結ぶ鉄道で、『申報』（一九二五年十一月二十五日付）に「二十二・二十三日に津浦線を通った奉天軍は約二万人」「直隸省奉天軍、津浦線の馬廠から楊村の間に、現在軍隊三旅団が駐留す」とあるのは、郁達夫の上京を阻んだ戦乱と関連すると思われる。ただ、郁達夫のこれらの記述は兵乱による交通遮断を嘆いたもので、事件そのものや時局に対する考えを示したのではない。『牢騷五種』で、国家主義者への批判を展開する中に、張作霖・馮玉祥・李景林等の名が見えるが、これもまた間接的な言及に過ぎない。

落ち着いてからその淵源を考えると、この交通の遮断、この生活の不安、この中国人の離散惨死は、一体誰がそのきっかけを作ったのか？ 私は弱い人間であり、凡人であって、刀を振るって賊を殺すことはできない。私は、この本を読む諸君が、読後に昂然と立ち上がり、あるいはここまで読んでこの本を放り出し、有用な時間をこのようになくならない寢言を読むのに浪費しないで、今すぐ戦いに立ち上がり、禽獣よりもはるかに劣る軍人共を殺し尽くすことを願うのみである。（『達夫全集』自序）

郁達夫がこの文章を書いたのは、郭松齡事件よりも半年ほど後のことである。北京の長男龍兒危篤の報に接し、上京を急いでいたが、この時も戦乱で鉄道網が寸断されていたため、郁達夫はやむなく上海から船便で向かうこととなる。我が子の安否を気遣う憂慮と焦燥が、この言葉を吐かせたものではあるが、ここに、民衆の平和な生活を破壊し、国家を疲弊へと陥れる軍閥への憎悪の念と糾弾を読み取ることは、あながち牽強付会とは言えないであろう。そもそも、郁達夫が巻き込まれた武昌師範大学での騒動も、軍閥に買収された一部の学生たちによって引き起こされたものであった。郭松齡の反乱の目的が、「（一）内戦に反対して平和を主張し、（二）張作霖に下野することを請い、（三）張学良を鎮威軍総司令に推挙すること」（『申報』一九二五年十一月二十六日付）であったとすれば、郭松齡軍の参謀である陳逸群という人物設定には、郁達夫のなにかの政治的思い入れが反映されていると考えても間違いではあるまい。ただし、以上見てきたように、執筆の動機は明白には認定しがたい。

結局、史実が反映されているのは、あくまで背景設定の段階であって、作品に描かれた陳逸群の心理状態も行動様式も、郁達夫自身の当時の状況が投影されたものであると言えよう。

### 五、続稿執筆への意欲と三部作構想

次に、『蜃楼』の続稿執筆に対する郁達夫の態度について見ていきたい。既に述べたように、第四章までを発表した一九二六年六月から、再掲載して第十二章までの連載を開始する一九三一年三月までにも、約五年のブランクがある。その間も、第五章以下を書こうという意思がありながら、なかなか書けなかったことが、いくつかの資料から窺われる。

『蜃楼』は、最初の『創造月刊』第一巻第四期に掲載時、第四章の最後に「未完」と記されている。そして、第五期『非編輯者言』で、郁達夫が「私の『蜃楼』は、元々既に書き上がってはいるが、同時に未完の作品でもある。従って今期は掲載せず、資平の作品を先に掲載してから、その後引き続き掲載していく」と述べていることから、『蜃楼』は当初『創造月刊』に連載する予定であったことは明らかである。しかし、長男の死や身辺の雑事に追われて、第五章以下の原稿が、次の第五期（雑誌の発行自体も遅延されている）に間に合わなかったであろう。その後、『蜃楼』執筆の意思を表す記述が、一九二七年一月十日・一九二八年二月十二日の日記に見える。一九二九年六月には、「今は状況も好転して、『蜃楼』もまもなく脱稿の予定です」（『拝金芸術』第十八章の訳者記）と表明されているが、

実現していない。日記と『回憶魯迅』の記述に拠れば、同年八月十二日、『蜃楼』の続稿を書くために杭州に出かけるが、数日もしない内に、北新書局から上海に帰ることを促す電報が来て、魯迅の印税をめぐるトラブル等を解決するために奔走することになる。従って、この時も執筆の目的を果たすことができなかった。

一九三〇年になると、一月十日・二月二十日・三月三日・六月七日・六月九日・六月十三日と、頻繁に『蜃楼』に言及している。そして、六月十三日以降のどの時点で書き始めたかは定かではないが、結局、五年後の一九三一年三月十日『青年界』創刊号から第三号にかけて、第十二章までが掲載されたのである。

続いて、それ以後の『蜃楼』に関する記述を追っていく。

一九三二年十月六日に、肺病の療養と『蜃楼』等の創作作品を完成させるため、郁達夫は再び杭州に赴く。その日から十一月十日までの生活を記録した『滄州日記』と『水明楼日記』、及び上海の妻王映霞に宛てた葉書には、『蜃楼』執筆への意欲を語る言葉が頻出する。『蜃楼』に言及している期日を挙げると、十月六・七・十五・十七・十八・二十九・三十・三十一日、十一月一・三・四・五・六・八・九日と、実に十五日間にわたっている。もちろん、執筆経過を記したものではなく、すべて「書こう」「書くんだ」という希望や抱負の表明である。しかし、その口調やトーンは、時を経るに従って微妙に変化している。

もしこのような晴天があと半月も続けば、『蜃楼』はきっと書き上がるだろう。(十月七日)

杭州にやって来たばかりの郁達夫の語調には、強い自信と意欲が感じられる。十四日には、友人が経営する西湖医院の水明楼に転居し、王映霞が送ってきたお金も受け取り、

この数十元があれば、おそらく『蜃楼』を書き上げることができようだろう。……(中略)……十一月末には、必ず『蜃楼』が仕上がるだろう。……(中略)……これからの日常生活用品は全てそろったので、あとは一心不乱に執筆するのを待つのみである。(十月十五日)

静かな落ち着いた環境と生活の準備も整い、いよいよ『蜃楼』に着手するかと思わせるが、実は郁達夫が抱えていた創作は、『蜃楼』ただ一編ではなかった。七日に訪れた翁家山に着想を得たのか、十日から新しい小説『遅桂花』の創作に取りかかっていた。この『遅桂花』の執筆は大変順調で、次のように述べている。

午前『遅桂花』を四千字書き、午後さらに千字書いた。創作力は、今日のようにであれば、まだ衰えていないと言える。今後もし毎日五千字書くことができれば、一ヶ月もしない内に、『蜃楼』は書き上がるだろう。(十月十八日)

自分の作家としての能力に自信を取り戻し、懸案の『蜃楼』の完成にも楽観的であるように感じられる。一方、同日の王映霞宛の葉書には、「今回は一大決心をして療養と執筆のために来たので、『蜃楼』を書き上げなければ絶対に帰りません」と、堅い決意が述べられている。本人も傑作と自負する『遅桂花』は二十日に脱稿するが、差し迫った経済的事情などもあったのであろう、その後も『蜃楼』には手を着けず、翻訳原稿と、二十九日からはさらに別の小説『碧浪湖の秋夜』を書き始め、三十一日に完成する。その日の日記には、こう記されている。

明日から、『蜃楼』に取りかかろう。十月は今日で終わりだ、来月の創作力はいかほどか見てみよう。もし十一月中旬に『蜃楼』が書き上がれば、今年の冬は青島の海岸に行つて過ごそう。(十月三十一日)

郁達夫の記述に、どこか焦りの色が見えてくるのは、十一月に入ってからである。

私は今日から毎日少しでも書くつもりです。出来はともかく、無理矢理でも『蜃楼』を書こうと思います。(十一月一日・王映霞宛の葉書)

この頃になると、書きたい、という積極的願望よりも、書かねばならない、という一種の強迫観念にも近い思いの方が勝ってきているようである。三日には、前章でも触れたが、実際に図書館に足を運び、郭松齡事件に関する資料を収集し、翌日から執筆に取りかかれるだろうと記している。この取材は、続稿の新たなストーリー展開に直接結びつくのか、陳逸群の回想場面の背景説明として必要なのか、あるいは、単なる着想のヒントを求めただけなのか、その意図ははっきりしない。いずれにせよ、取材も完了して、あとは筆をおろすばかりになっていたにも関わらず、

杭州に来てから、今日でちょうど一ヶ月になるが、書く予定であった『蜃楼』が未だ目鼻がつかない、心中焦燥の至りだ。(十一月六日)

とあり、同日の王映霞宛の葉書にも、次のように書き送っている。

……ここ二、三日、本を読むだけで、まだ創作に着手していません。心中大変焦っています。しかし、どうあろうと今回は、何としてもこれを書き上げなければなりません。これ以外のことはすべてしばらく置いておきます。おそらく二週間後にはきっと何らかの成果が見られるでしょう。……中華の原稿は、新しく書く長編『蜃楼』の中の一段を抄録することに決めました。

『蜃楼』執筆に、いよいよ背水の陣で臨もうという覚悟の程が窺われる。中華の原稿とは、前日五日の日記に、「中華書局の雑誌『新中華』に原稿を募集する手紙一通」とある、この原稿のことを指すのであろう。どうやら、この時点では、

『蜃楼』の続稿が二週間後にはある程度書けているだろうと思っており、その一部を『新中華』に発表するつもりであったのであろう。しかし、一九三三年一月十日に発行された『新中華』創刊号には、その後書いた小説『瓢児和尚』(三十二年十二月作)が掲載されている。『蜃楼』が一定量書けていれば、当初の予定通り載せるであろうから、やはり『蜃楼』の執筆は進まなかったとみてよいだろう。あるいは、焦れば焦るほど、かえって書けなくなってしまうのかもかもしれない。

近頃考えが散漫になってしまっ、ここ十数日間、とうとう『蜃楼』の執筆に取りかかれなかった。(十一月九日)

現在公刊されている日記で追跡できるのはここまでであるが、翌一九三三年五月二八日、北新書局經理李小峰宛の手紙でも、なお『蜃楼』に言及して、次のように述べている。

『蜃楼』は必ず書き上げようと思っています。おそらく今年は書き上がるでしょう。しかし、『文芸批評論』と『蜃楼』とは激しく衝突するもので、両者は絶対に同時に書くことはできません。

郁達夫は、この頃『達夫全集』第七卷『断残集』を編集集中で、その仕事が終わりに次第、引き続き『文芸批評論』を書くつもりであったが、この計画も結局実現しなかった。いずれにせよ、『蜃楼』の中断から二年、発表開始から数えると実に七年経った時点でも、『蜃楼』完成への意欲や執着は失われていないことが確認できる。しかし、結果的には、『蜃楼』の続編はとうとう世に問われることはなかった。

ここで、郁達夫と王映霞の長子である郁飛による興味深い証言がある。郁達夫は、『星洲日報』の招聘を受けて一九三八年から一九四二年にかけてシンガポールに滞在するが、その時妻王映霞と共に帯同したのが、郁飛であった。彼は、シンガポール陥落直前、先にシンガポールを脱出する。

後日、残念でならず、しかも取り返しつかないことは、父の一包の原稿を国内に持ち帰ることを思いつかなかったことである。この原稿は、私が常日頃から確かに目にしていたのだが、青いインクで書かれた以前の作品『蜃楼』(おそらく『創造月刊』一卷四期に発表された未完稿の続稿であろう)で、たぶん杭州に転居して以来ずっと手元に持っていたのであろう。私はこれ以外に『蜃楼』の原稿を見たことがないので、おそらくこれしかなかったであろう。私は持ち出すことに気がつかなかったが、父も離れるとき持つて行かなかつたはずだ。だとすれば、その行方は想像に難くない。

郁飛の記憶が正しければ、未発表の『蜃楼』の原稿が存在していたことになる。

一つ気になるのは、『蜃楼』の掲載について『創造月刊』一卷四期を挙げただけで、その後の続稿が発表された『青年界』には触れられていないことである。当該論文は一九七九年に記憶に頼って書かれたものであるから、その段階では、『青年界』に再連載されていた事実は把握できていなかったのかもしれない。もしそうだとすると、既に公刊した原稿を持ち歩くことは考えられないので、彼の見た原稿が『蜃楼』であるならば、それは第十三章以降の未発表分である可能性が高い。次の疑問は、その原稿が完成原稿だったのか、それとも執筆途中のものだったのか、という点である。原稿が紛失してしまった今となっては、想像の域を出ないが、完成していたならば発表の機会がなかったわけではないのであるから、たとえ一定のまとまった分量を書き上げていたとしても、やはりまだ未完の状態だったのではないかと思われる。しかし、ここで注目したいのは、杭州転居後各地を転々としたにも関わらず、さらにこのような緊迫した戦時下においてさえ、『蜃楼』の原稿を持ち続けていたというその点である。これまで郁達夫の日記や書簡の記述を通して、彼の『蜃楼』に対する強い執着を見てきたが、郁飛の目撃証言は、その貴重な傍証であると言えよう。

それにしても、郁達夫は『蜃楼』に、なぜこれほどまでこだわったのであろうか。私は、その要因の一つとして、三部作の構想が大きな影響を与えているのではないかと考える。三部作構想に最初に言及したのは、銭杏邨の『達夫代表作』後序(一九二八年三月十五日)である。

達夫自身の話によると、彼は今三部作の制作に従事しており、この三部作で中国の過去現在と未来の青年の三つの時代を象徴させるといふ。第一作は『迷羊』で、無邪気な時代を表し、第二作は『蜃楼』で、懐疑の時代を表し、第三作は『春潮』で、革命の時代を表す。第一作は既に発行され、第二作はまだ執筆中である。……我々は彼がはやくこの使命を全うして、十年來の青年の思想の変化に総決算をし、彼の時代表現の仕事の完成させることを心から願っている。

郁達夫本人の文章ではないが、構想の内容はかなり具体的であり(銭杏邨の捏造であるとは考えにくい)、彼自身の発言に基づく記述であると考えて差し支えなからう。郁達夫が直接三部作の構想について述べるのは、現在知りうる限りでは、それより二年余り後の一九三〇年六月十三日の日記の中である。

昨晚たくさんの題名を考えた、『梅雨晴時』『二十年間』のようなもの。しかし、気が散ってすぐ書き始めることはできない。……(中略)……『二十年間』は、『迷羊』『蜃楼』『春潮』三部作の総合タイトルにできよう。この二ヶ月の

間に、『蜃楼』と『春潮』を書き上げて、それから翻訳をしよう。

両者の記述を総合すると、郁達夫は二十年間という長いスパンを念頭に置いて、『迷羊』『蜃楼』『春潮』の三作品によって、中国の過去・現在・未来三時代の青年の生き方を描こうと企図していた、と考えられる。

では、この三部作構想はいつ頃から彼の意識にのぼっていたのであろうか。銭杏邨の文章より前であることは確かである。ちなみに、作品の発表順序を見ると、

一九二二年十一月二十五日 『春潮』(第四章まで、未完)

一九二六年六月一日 『蜃楼』(第四章まで、未完)

一九二七年十一月一日～二八年一月一日 『迷羊』(一月十日には、単行本として北新書局より出版)

第三作にあたる『春潮』が最も早くに書かれ、以下第二作・第一作と、三部作の順序とは逆に執筆されている。そして、銭杏邨の文章は、第一作の『迷羊』が発表されてまもなく書かれたものである。私は、『春潮』や『蜃楼』を執筆中にはまだ三部作とすることは構想されておらず、『迷羊』の執筆前後に思いついたのではないかと思う。なぜなら、『蜃楼』と『迷羊』の間の一九二七年一月十日の日記には、これから数カ月以内に書き上げようと思っている未完の小説として、『蜃楼』『她是一個弱女子』『春潮』の三編の名が挙がっている。ところが、『迷羊』と銭杏邨の文章の間の一九二八年二月十二日の日記では、「急いで『蜃楼』と『春潮』二編の中編を書かなければならない」とあり、『她是一個弱女子』はまだ書けていないにも関わらず、懸案の未完小説からひとまずはずされ、それ以後、郁達夫の執心の対象は『蜃楼』一編へと絞り込まれていくのである。郁達夫としては、第一作の中編『迷羊』を完成させた以上、時代を描くという遠大な計画を何としても実現させたい。そのためには、第二作の『蜃楼』をまず書き上げなければ、第三作の『春潮』にも取りかかれないからである。

もちろん、陳逸群や康夫人などの人物形象への思い入れや、杭州の風光に対する愛情、郁達夫としては珍しく同時代史を背景とした異色作であるといった、小説『蜃楼』そのものへの愛着が、続稿執筆にこだわる原動力となっている側面も無視できない。しかし、やはり、三部作の完成という大事業への意欲が、『蜃楼』完成に対する執着のより根元的な理由としてあったことを指摘しておきたい。

ところで、郁達夫とほぼ同時期に、茅盾もまた、三部作の小説によって革命期の青年たちを描こうとした。『幻滅』『動搖』『追求』からなる『蝕』三部作である。今その影響関係や作品の優劣を論じるゆとりはないが、この偶然の一致は、まさに激動する社会が、作家をして、その時代を写し取り、そこに生きる人々を描き

たいという欲求を覚えさせたのだと考えたい。そして、時代という壮大なテーマを描くためには、十分な時間的長さや空間的広がりや許容できる三部作という方法が最適だったということであろう。ただし、郁達夫の構想は結実せず、一方、

茅盾は作品を次々と書き上げて大反響を呼ぶことになる。そこに、作家としての気質や作風の違いが如実に表れているといえよう。茅盾の『蝕』三部作以後、巴金の『愛情』三部作、『激流』三部作など、新文学史上評価の高い大作が生まれているが、中国現代文学における三部作は、茅盾といい、巴金といい、いわゆる長編作家の出現を待って、実質上、成立したということであろう。

## 六、おわりに

最後に、以上の『蜃楼』の内容とその創作経緯の検証を踏まえて、『蜃楼』が未完に終わった原因を整理しておきたい。

この問題に関して、郁達夫自身が日記の中で分析しているので、その記述をまず引用する。

私の気分は、波のように緊張したり緩んだりで、一年半もの長期間持続することはできない。しかし落ち込んだときでも、とことんまで沈み込んでしまつてしまつてにはならない。結局はやはり(一)修養の不足(二)生活の窮迫(三)環境の墮落が招いた結果である。

一年半というのは、『蜃楼』が第十二章まで『青年界』に発表された、一九三一年五月十日から経過した時間のことである。郁達夫が自覚している原因のうち、持続力の欠如と修養の不足は内在的要因で、生活の窮迫と環境の墮落は外在的要因といえよう。

外在的要因は、比較的容易に理解できるものである。郁達夫は、大学教師の職にあった時期もあるが、基本的には原稿収入によって、王映霞と子どもたちを養い、さらに故郷の第一夫人孫荃に仕送りをしていた。そのため、ときには当面の生活費を捻出するために、短時間で仕上がる雑文や翻訳に手を染めなければならぬようなこともあった。つまり、じっくり腰を据えて長編小説に取り組めるだけの経済的余裕がなかったのである。また、著名人であった郁達夫は、好むと好まざるに関わらず、種々の交際に時間をとられることも多かったであろう。たとえば、一九三二年十一月八日の手紙には、知人友人が数日間順繰りに招待してくれたという件が見える。その他、転変著しい激動期の中国社会において、身の危険に直面したり、身の雑事に煩わされることも少なくはなかったに違いない。しかし、より重要で根本的な原因は、内在的要因にあると思われる。郁達夫の

創作方法は、端的に言うると、自己の体験や見聞から得た着想と情調を元に、情緒の赴くままに一気に書き上げる、というタイプである。従って、その情緒と緊張感を長期間一定の水準に保ち続けることは、極めて難しいことである。まして、『蜃楼』のように執筆の中断期間が長くなってしまった場合、感情を元の状態にもっていくのは一層困難であろう。日記や書簡で幾度となく再執筆の宣言をしなから、とうとう実行に移せなかつたのは、そのためであつたと思われる。

さらに、このような気持ちの問題と同時に、小説技法の問題がある。長編小説を書くには、とりわけ緻密な構成力と人物造形力が必要とされる。ところが、第三章で見てきたように、『蜃楼』は主題も明白でなく、各種のモチーフも構成上の有機性が考慮されたものではない。専ら主人公の心情を纏綿と描写するだけで、他の登場人物と絡む実質的ストーリー展開もない。これは、『蜃楼』一編の問題に止まらず、郁達夫の文学のあり方そのものに起因するものである。許子東が、「郁達夫は、単純な情感と懺悔の方式で、広大な大河小説を書くこととしたので、実際には流産してしまつたとも言える」と述べているのは、まさに核心を衝いた鋭い指摘だと思われる。結局、『蜃楼』の挫折は、郁達夫の文学的特質とその限界性をも象徴していると言えよう。

注

- (1) 『没落』については未確認。王観泉『頹廢中隠現輝煌—郁達夫』(上海書店出版社、二〇〇一年)に拠れば、一九三〇年、郁達夫の家にあつた『没落』の未完の原稿が、史濟行によって盗まれ、郁達夫が原稿依頼を承諾するはずのない反動的で低級な雑誌『草野』第二巻第十一号に勝手に発表されたものであるらしい。しかも、それは彼らがプロレタリア文学を攻撃するための体の良い道具として利用されたのである。小説『没落』が未完となつた背景には、信頼していた文学青年による裏切りという痛恨の事件があつたのである。
- (2) 『青年界』は、一九三二年三月十日、上海北新書局から創刊された月刊誌である。該誌への寄稿は、郁達夫と北新書局との数年來の關係に因るものであろう。既発表の第一章から掲載したのは、最初の発表時より余りにも長い年月が経つてゐること、また、新規創刊の雑誌に小説の途中から連載を始めるのは体裁が良くなかつたからであらうか。なお、小稿は『郁達夫文集』第二巻・海外版(生活・讀書・新知三聯書店、花城出版社、一九八二年)をテキストとしている。ただし、所収の『蜃楼』は『青年界』に掲載されたものに拠つてゐる。
- (3) 『蜃楼』は、『創造月刊』への最初の発表から、『青年界』に再度連載を開始するまで、約五年の歳月を経ている。第四章までを再掲載する際、作者によって幾分修正が加えられているが、大部分が文意を明解にするための句読点や小さな文字句の変更、修飾語の挿入などで、ストーリーに影響を与えるような大きな変更は行われていない。ただ一つ、第四章最後の、陳逸群が旅館に帰つて来て、西湖図志や遊覧指南をめくりながら、「きつと彼女の居場所を探して、氏

素性を明らかにしてやるぞ」と決意するくだりは、『創造月刊』にはなく、再掲載時に加筆されたものと考えられる。おそらく、続稿執筆を開始するに当たつて、次章(第五章)の展開との整合性上、加筆する必要が生じたためであらう。

- (4) 充分成熟した言葉ではないが、ここでは例えば堀辰雄の『風立ちぬ』のような、療養生活を描いた小説を想定している。
- (5) 郭松齡の事件については、『中国近代軍閥史詞典』(田子渝、劉德軍主編、档案出版社、一九八九年)、『アジア歴史事典』(平凡社、一九九九年)、『中国20世紀史』(姫田光義等、東京大学出版会、一九九三年)等を参照。なお、一九二五年十一月二十五日の『晨报』には、「奉天内部に大変動が発生す」という見出しで、二十三日夜十二時三十分(あるいは二十四日朝三時)に山海關駐屯の奉天軍に突然異変が起きた云々と、第一報が伝えられてゐる。同日の『申報』にも、「李景林・郭松齡が奉天軍に対して独立し、張作霖の下野を迫る」とある。その後両紙ともに毎日、郭松齡軍と奉天軍の動向を伝える記事が掲載される中、『晨报』十二月八日に、「奉天七日電に拠れば、郭松齡は本日錦州に入り、まもなく総司令部を該地に移し…」とあり、二十七日「郭松齡大敗す」の見出しのもとに、二十三・二十四両日に行われた最後の激戦で大敗を喫した郭松齡軍は、千名以上が捕虜となり、数十人の護衛隊と共に敗走した郭松齡は捕らえられた後処刑された、と述べられている。
- (6) 伊藤虎九他編『郁達夫資料総目録附年譜(下)』(東大東文研、一九九〇年)及び郭文友『千秋歌—郁達夫年譜長編』(四川人民出版社、一九九六年)に拠る。
- (7) 『創造月刊』第一巻第五期、一九二六年七月一日。
- (8) 『洪水半月刊』第一巻第八期。ただし、ここでは『郁達夫文集』に拠る。
- (9) 丁言昭編『郁達夫日記』(山西教育出版社、一九九八年)。以下、日記は全て本書に拠る。
- (10) 王映霞宛の葉書は、すべて、王観泉編『達夫書簡—致王映霞』(天津人民出版社、一九八二年)に拠る。
- (11) 注(10)所掲書の注では、前日の手紙の「目下精神を集中して『蜃楼』を書いてゐます」とこの日の文面とを根拠に、発表済みの十二章以外に未発表の原稿があつたと判断している。しかし、その前後の日記の記述と幾分矛盾すると感じられるところもあり、小稿では、この説は採らな
- (12) 郁雲『郁達夫伝』(福建人民出版社、一九八四年、一一一頁)。
- (13) 郁飛『雜憶父親郁達夫在星洲的三年』(『新文学史料』第五輯、一九七九年十一月、一六九頁)。
- (14) 『達夫代表作』(春野書店、一九二八年)所収、未見。ここでは、『郁達夫研究資料(上集)』(花城出版社、一九八五年、五〇—五一頁)に拠る。
- (15) 一九三二年十一月九日の日記。
- (16) 『郁達夫新論』(浙江文芸出版社、一九八五年、八二頁)。(平成十三年九月十一日受理)